

# 城館めぐり

画業初期には個性豊かな室内の調度品を、初渡欧後は異国の景観を描いた三岸節子。フランスでは郊外の城館を巡り、その姿をスケッチしました。作中の建築モチーフに焦点を当て、節子の建築への眼差しを紹介します。

## 憧れの地 フランス

節子や夫・三岸好太郎(1903-1934)が生きた時代は、マチスのフォービズム(野獣派)、ピカソやブラックのキュビズムといった20世紀フランス美術が華やいだ時代にあたり、日本の洋画界でもフランスへ留学し、現地の流行を取り入れようとする動きが活発でした。1920年代には、二人の周りでも、佐伯祐三・米子夫妻や荻須高德、里見勝蔵といった近しい洋画家たちがパリへと渡っています。同様に、若いころからフランスへの憧れを抱いていた節子ですが、念願の渡仏が叶ったのは、1954(昭和29)年、49歳の時でした。

1954年、永いこと憧れていたフランスに渡った。私の風景への初挑戦である。パリに着いて間もなく、車でフランス中に出掛けた。パリだけでなく、田舎も歩いた。ロワールのシャトゥ巡り、南仏の光輝く景色、何もかもまるで夢の中のようなようだった(注1)。

この時、節子は自身より半年早くフランスへ渡っていた息子・黄太郎とともに、およそ1年間のフランス滞在を楽しみました。同行していた黄太郎も、「節子はエッフェル塔、エトワール凱旋門、ノートルダム大聖堂といった、ずっと聞き知っていたフランスの名所の数々にただひたすらに感動していた」と語っています(注2)。節子の言葉からも、その喜びようがうかがえます。



1954年、パリ・ノートルダム寺院前の広場にて

## ロワールの古城をめぐる

ロワール地方にはたくさんの古城が点在し全部見れば何日もかかる。ロワールはフランスの庭といわれるくらい美しく、ところどころに点在する古城を訪れるのも、また楽しい(注3)。

節子がこのように語るロワール地方は、フランスの中央部を流れるロワール川沿いに古城が立ち並ぶ、世界文化遺産にも登録される地域です。節子は、1954(昭和29)年の初渡欧時からロワールの古城を訪ねており、数々のデッサンを残しています。1968(昭和43)年からの二度目の渡欧時を含めると、その行先は記録に残るだけでも20を越えています。中には、小説家・バルザックにアンドル川の宝石と称えられた16世紀初期ルネサンス様式のアゼ・ル・リドー城、童話『眠れる森の美女』が執筆され、物語の舞台にもなったユッセ城、15世紀にジャンヌ・ダルクがシャルル7世に謁見したシノン城、シャルル7世の居城で中世の城塞都市に建つロシュ城などがあり、壮大な歴史を秘めた城館を渡り歩いていました。



ロワール川のお城にて

## 心象の風景画

節子の旅路は拠点としたフランスだけではなく、イタリアのヴェネチアやシチリア島、スペインへと続きます。訪れた先でスケッチをくり返し、異国の景観を油彩にしたためた節子ですが、描きためたデッサンをそのまま油彩画として写し描くことは少なかったといえます(注4)。

果して私は風景画家となっただろうか。私はあくまでも名所絵葉書のような風景にはしたくなかった。自分なりに消化し、私の世界を造ったつもりだ。デッサンはその意味では一つの過程である(注5)。

油彩の風景画に描かれる景色は、実際の景色を額縁で切り取ったものではなく、デッサンを通して記憶したその土地のイメージを、自身の感覚で捉え直して描き出したものでした。《カーニュ風景》(No.8)を見てみると、直線と色面を駆使し、街を彩る黄色のミモザや、立ち並ぶ建物が幾何学的に描かれます。《イル・サンルイの秋》(No.14)では、街並みを形作る白い壁の建物をひとつひとつ捉えつつ、装飾的な曲線と重厚なマチエール、深みのある色彩が加えられ、街を訪れた秋が表現されています。抽象的ともいえるこれらの風景画には、節子が旅先でのデッサンをもとに創り出した世界が描かれていたのです。



《イル・サンルイの秋》1987年 ©MIGISHI

(注1)三岸節子「旅へのいざない」『三岸節子ヨーロッパデッサン集 1954-1989 旅へのいざない』求龍堂、1997年、p.3。

(注2)三岸黄太郎「旅への誘惑」『三岸節子と旅展』一宮市三岸節子記念美術館、2000年、p.13。

(注3)三岸節子「パリ-南仏 初渡欧 1954-1955」『三岸節子ヨーロッパデッサン集 1954-1989 旅へのいざない』p.10。

(注4)三岸黄太郎「旅への誘惑」『三岸節子と旅展』p.14。

(注5)三岸節子「旅へのいざない」『三岸節子ヨーロッパデッサン集 1954-1989 旅へのいざない』p.3。